

活動の成果を  
広く共有する  
保険者フェスタを開催

(社)保険者機能を推進する会

全国121の健康保険組合等が参加する（一社）保険者機能を推進する会は2025年11月20日、都内で「保険者フェスタ」を開催した。これまで講演会形式の「保険者機能推進全国大会」を開催してきたが、今回は9つの研究会が活動の成果を持ち寄り、シェアする方式へと変更。当日は療養費適正化研究会、レセプト・健診データ分析研究会、たばこ対策研究会、女性の健康研究会、特定保健指導応用研究会、シニアの健康研究会、マイナンバー特別研究会、扶養認定基準研究会の8つの研究会がブースを設けて活動内容をアピールしたほか、健診事業のあり方研究会が特別講演会を開催した。

特別講演会では、「がん検診の「質」を守る仕組み」をテーマに、国立がん研究センターがん対策研究所研究員の高橋宏和氏と、摂南大学農学部食品栄養学科教授の小川俊夫氏が登壇した。



会場では、各研究会が活動内容や研究成果の展示・発表を行った。VR生理痛体験やVR鍼灸体験、COPD体験、ロコモチェックなど、参加型の企画が多く実施され、来場者の関心を引いた。



研究会の発表を熱心に聞く参加者

表された厚生労働省の「職域におけるがん検診に関するマニュアル」について紹介し、がん検診の目的は早期発見による死亡率減少であり、科学的根拠に基づく「正しい検診」を、精度管理のうえで「正しく実施」する重要性を強調。がん検診には偽陽性・偽陰性、過剰診断等の不利益も伴うため、利益とのバランスを踏まえた提供が不可欠と語った。また、検診には限界があることから、症状への気づきや生活習慣改善などのがん予防策も合わせて実施する必要性を指

摘した

小川氏は、厚生労働科学研究の一環で開発した「がん検診精度管理システム」について説明。同システムは、レセプトデータや検診結果をシステムに投入することで、精密検査の受診率やがん発見率等の精度管理指標を自動で算出できるというもの。現在、健保組合等でトライアル版を運用しており、同システムを活用した受診勧奨などで精密検査受診率の改善が見られているほか、健保組合間での比較などにも役立てれていることを紹

介した。今後は、健保組合だけではなく、全国健康保険協会や自治体への展開も視野に入れ、全国的ながん検診の質の向上につなげていきたいと語った。

最後に、東京大学未来ビジョン研究センター特任教授・古井祐司氏が全体の講評を行った。古井氏は、健保組合の強みは現場の実情を踏まえた政策課題の設定から社会実装まで担える点であると述べ、日本の競争力の基盤となる「人材の資本投資」の土台は保険者機能であるとの見解を示した。また、今回のフェエスタにおける各研究会の工夫を凝らした成果発表について触れ、「今後も現場での本音や暗黙知を持ち寄りつつ、各研究会のカラーや参加者の思いを大切にした研究会を続けてほしい」と呼び掛け、こうした取り組みの積み重ねが加入者のウエルビーイングと日本の医療・健康政策への貢献につながると強調した。

当日は現地参加約450人、ウェブ参加約150人の計約600人が参加し、盛況なイベントとなつた「保険者フェエスタ」。各研究会の先進的な活動が保険者機能のさらなる發揮につながることが期待される。

※冒書は2025年11月20日取材当時のものです